

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--25

2023年08月

写者

小原靖夫

第25回 信仰の先達として証しされた人びと⑤

偉大なモーセとそれに続く者たち

ヘブライ人への手紙第11章②③節から④⑩節

- ②③信仰によって、モーセは生まれてから三か月間、両親によって隠されました。
その子の美しさを見、王の命令を恐れなかったからです。
- ④⑤信仰によって、モーセは成人したとき、ファラオの王女の子と呼ばれることを拒んで、
⑤はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選び、
⑥キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。
与えられる報いに目を向けていたからです。
- ⑦信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。
目に見えない方を見ているようにして、耐え忍んでいたからです。
- ⑧信仰によって、モーセは滅ぼす者が長子たちに手をくだすことがないように、
過越の食事をし、小羊の血を振りかけました。
- ⑨信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。
同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。
- ⑩信仰によって、エリコの城壁は、人々が周りを七日間回った後、崩れ落ちました。
- ⑪信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、
不従順な者たちと一緒に殺されなくて済みました。
- ⑫これ以上、何を話そう。
もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、
また預言者たちのことを語るなら、時間が足りないでしょう
- ⑬信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、
約束されたものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、
- ⑭燃え盛る火を消し、剣の刃を逃れ、弱かったのに強い者とされ、
戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。
- ⑮女たちは、死んだ身内を生き返らせてもらいました。
他の人たちは、更にまさったよみがえりに達するために、
釈放を拒み、拷問にかけられました。

- ⑳また、他の人たちはあざけられ、鞭打たれ、鎖につながれ、
投獄されるという目に遭いました。
- ㉑彼らは石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、
剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、
暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され、
- ㉒荒野、山、岩穴、地の割れ目をさまよい歩きました。
世は彼らにふさわしくなかったのです。
- ㉓ところで、この人たちはすべて、
その信仰のゆえに神に認められながらも、約束されたものを手に入れませんでした。
- ㉔神は、わたしたちのために、更にまさったものを計画してくださったので、
わたしたちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかったのです。

第11章の「信仰とは」という学びが今回で5回目ですが、今回は㉓節からあとの部分を学んでいきます。

私は、この手紙の著者がアブラハムについて非常に多くの紙面を割き、彼の信仰を語り語った部分に着眼しましたが、この㉓節ではモーセという先達に深く論及しています。著者は、旧約聖書に精通していた人物と考えられますが、彼はその中で、「アブラハムは神から『約束』を頂いた」、「モーセは神から『律法』を頂いた」という、特別な天賦に基づいて、その二人をクローズアップしているのではないかと思います。

あとは、「神から御言を預かった人物」として、預言者たちをまとめて紹介していますが、「少なくとも、神が私たちに与えてくださる恵みの基は、アブラハムとモーセを介して、既に与えられていたのだ」ということをはっきり伝えたい意向から、これ以降、モーセという人物にも着眼して登場させているのではと思います。

「信仰によって」という書き出しで、彼の信仰とはどんなものか、彼の信仰はどのように具現化していくのかを説いてゆくわけですが、今日の㉓節以下では各節の冒頭に、はっきりした形で「信仰によって、信仰によって」と繰り返されていきますから、その部分に触れながら考えてゆきたいと思います。

第㉓節、

信仰によって、モーセは生まれてから三か月間、両親によって隠されました。その子の美しさを見、王の命令を恐れなかったからです。

ここでは「信仰によって・・・王の命令を恐れなかった」と言っています。

モーセが生まれた時代のユダヤ人たちは、丁度食糧難でエジプトに逃れて来たユダの子孫として生まれた者たちですから、人口が増しておりました。そして王様はこの国の人々より優れた能力をもったユダヤ人たちがあまりに増えてしまっただけで都合が悪いと考え、世界でも最悪の命令とされる「男の子が生まれたら皆殺しにしろ」という王命が出たことが、

出エジプト記1章22節に「ファラオは全国民に命じた。『生まれた男の子は、一人残らずナイル川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。』」と明記されています。

そして23節には「モーセの両親は、神の与えてくださった我が子の顔に特別な輝きを見て、心が強く惹かれ、王命に背けば自分たちの命も奪われるという恐怖心を超えて、神が与えてくださる恵みに応えようとした三か月間を送った」ということが記されています。

<信仰があるかどうか>という問題は、「何に目を留めるか」という視点の問題です。つまり、<自分は>どうしたら命を全うできるだろうとか、この時代にうまく適合して生きてゆけるだろうかを考えるのではなく、「何が起きても、そのことの中で、<神は>何を与えてくださろうとしているのか、何を恵んでくださっているかを、しっかり見つめて生きて行くのが信仰ですよ」と言っているわけです。

今年の新年初週祈祷会で教団の聖書日課に従い、イザヤ書を一緒に学んでいったその中で、同盟軍を迎え撃とうとして、王様が慌てふためいてどこかの国と同盟を結ぼうと考えた時に、イザヤが「そんなことであたふたせず、落ち着いて静かにしていなさい。慌てふためいてはならない、神に寄り頼まない同盟など、何の意味もない」と説諭するところを学んだのです。

ですが、私たちはともすると「周りに起こっている現象や事柄に振り回されて、落ち着いて神が与えてくださるものが何なのかをしっかりと見極められない」、そういう破れた状態に陥りがちなのです。

「信仰とは、どんな時にも神が今、私に最善を為してくださることを信じ、現状を喜び感謝して受け止め、慌てふためかないこと」です。だが、これはとても難しい問題だなと思います。私たちは何かあるとすぐ慌てふためき、その何かに振り回されてしまいます。

イザヤはその7章で「同盟軍が攻め寄せて来たということを知り、王の心も民の心も森の木々が嵐に揺れ騒ぐように動揺した」と、もうどうしていいかわからなくなった狼狽ぶりを記しています。

今の日本の経済状況は、まさしく、その通りなのです。

リストラが行われるとか様々な噂が飛び交い、不満が膨らんでいることが報道されると、もう何も判断がつかず、どうしたらよいのだろうかと思ってしまう。それがどんなに不安な状況か、という例が、この前のニュースです。

「12月には郵便貯金の貯金高が例年になく三兆円に達しました。言い換えれば、ボーナスを使ってしまっただけで大変なことになるということで、皆貯金してしまったということです。恐らく今度減税したって同じことになるでしょうから、景気などちつとも良くなりませんという予測は立つはずなのですが、どうも内閣はそうは考えないらしく、減税したら効果があると今も言っています。」と。

生活の資としてきたボーナスさえ全額貯め込んで、必死になって自己防衛しようとしている私たち日本人に対しても「慌てふためくな」とイザヤは檄を飛ばすのです。更に彼は「落ち着いて静かにしていなさい、恐れることはない」とも告げるのです。言い換えると「何が起こっても神が私たちと共にいてくださるのだから、たとえ私たちの身が世に晒されようとも、神が善しとなさったことなのだから、そのことは既に神の御計画の中に入っているのだ」という揺らぎない主張をイザヤはなし、またここでも「王命さえも恐れなかった」というモーセの両親と同じ姿勢が窺えます。

これは「神の為せるわざの中に、すべてを委ねようではないか」ということで、「王様が命じられる通りにすることが、自分たちの延命のためには第一だ」とは考えなかった。「だから、身を捨てて神の言葉に従ったのだ」という一つの事例として、著者はモーセの両親の出来事を告げているのだと思います。

ところが、面と向かって「神を信じることは、王様の命令も時には逆らうことです、命を奪われても神の御言に従うことです、神から賜ったことだけを大事にすることですよ」と言われますと、「どうも私にはできないな、これは。特別に選ばれた人間にしか無理だなあ」と、腰の引けた状態になるだろうと思います。

一方、イエス・キリストの十字架の救いを未だ見ていなかった旧約時代の人々は「大事な人の救いのためには、自分の命を捨てることもあり得ることだ」と本気になって信じたのです。そして「この世に生きているだけでなく、神の国に生きている者もあるのだ。だから、この世で死んでも、神の国で生きることはできるのだ。」という信仰的生死観が、少なくともモーセの両親やこの時代の人々の心中にはあっただろうと思います。

⑳節は「信仰とは、二者択一のどっちという問題ではなく、一方に命を懸けるものです。何も恐れなくて、神だけを畏れることですよ。」ということ告げています。

そして「何も恐れることなく、神の御言に従える者になれますように」という祈りが、私たちの裡から湧き出てきた時、「神の御言は本当に生きて、力あるものになって行く」と思います。三か月間、王に隠してモーセを育てた両親の決死の判断による結果のように。

第㉔から㉖節、

信仰によって、モーセは成人した時、ファラオの王女の子と呼ばれることを拒んで、はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選び、キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。与えられる報いに目を向けていたからです。

このことは、「信仰とは、時々刻々私たちの周辺に起こる事柄に対して選択をし続けていくこと、その時の選択の基準がどこにあるのかが大いに問題になるのだ」と言っているのです。

ファラオの王女の子どもであり続けるならば、彼は社会的にも政治的にも経済的にも恵

まれた状態で生活することができた。豊かな富があり、高い地位があり、様々な形で楽しむことのできる環境が彼の前には提供されていた。ところが、モーセはそれを拒否したのです。

ここでは二つの言葉が対比されて書かれています。

第一には「はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選んだ」とあり、すごく際立った形の比較が描かれています。神の民ユダヤ人は、エジプトの文化や文明の中では「虐待の対象」であった。つまり「信仰を保持することは、虐待される側にまわることである」と言っています。

その次のところでは「キリストのゆえに受けるあざけりを、エジプトの財宝よりまさる富と考えました」とあります。「イエス・キリストを信じて生きると、キリストの救いの成就を妨げるサタンが働いて、この世から嘲りを受けるが、その嘲りこそが、この世のどんな富にもまさる、霊的に溢れる富の授与の保障と考えた」と告げています。

「モーセはそれを選び取った」と書いてあります。ということは、「この手紙を書いた時代、イエスをキリストと告白する人々の群れは、そういう信仰継承の中で生きていた、そういう信条を抱いて信仰生活を送っていた」と言えるのです。

私たち日本には信仰的差別や迫害はないと言われていますが、いやいや、文化的迫害、経済的迫害、社会的迫害など一杯あるのです。ですが、それを恐れていては駄目です。キリスト者であることに誇りを持って、「私は主によって何でもできる」と宣言しなければなりません。「自分が生きる道として何を選び取ったかが、絶えず問われており、そうした決断の場として、この世の日々が与えられているのです」と、ここでは語っています。

では、モーセはなぜ、豊かで晴れがましい人生を保障するエジプト王室での地位を捨てたのか、なぜ、高い地位を拒絶して虐待を受ける道を選び取り、嘲られることを進んで受け取ったのか。それは、モーセには、神が与えてくださる大いなる希望の道が遙か先まで見えていたからです。言い換えると、それが「神と共に歩む」ことがゆるされている道であり、何よりもそれが一番自分にとって最も慕わしく、最も相応しく、しかも自分自身が選ばなければならない必然の道であると、確信を抱いていたからなのです。

第⑦節

信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、耐えしのんでいたからです。

目に見えない方を見る、見えない方に目を注ぐ。聖書の中ではしばしばそのようなことが出て来ます。見えるものはこの世限定のものであって、永遠ではない。だから私たちは見えない霊的な永遠のものに目を注いで生きていくべきなのです。

著者は「神が与えてくださると約束したものは、今、目に見えてはいない、実現していな

い、自分の手に握ることはできてはいない。けれども、モーセは既に与えられたと信じて、そのことに喜んで命を懸けて生きた。与えられたから喜んでいるのではない。与えられたと信じて、喜んでいるのだ。」と言っています。

私たちの喜びは、あまりに即物的なのです。そこで、物が与えられるから喜ぶ、願った事が成就したから喜ぶのです。ところが、この手紙が告げている喜びはそうではありません。今は全く見えないのに、神がそうしてくださると約束されているから、感謝して喜ぶのだ。要するに「神の御言への信頼だけが、希望の基」という信仰です。

今、手に握っていると思うものも、神が不要とお考えになれば、忽ち消え去ってしまう。目に見えるものは一時的で、この世だけの物である。私たちが確かに手に入れ、これさえあればと身を委ねる物は、神御自身がご覧になると、その身を救うに何の力も何の価値もない物、死せるときには、自分の手から消え失せる物でしかないのだ。

それは、ちょうど、荒野でイスラエルの人たちが、食物が欲しいと叫んで天から与えられた「マナ」のような物です。実質的にお腹を満たしてくれ、彼らは命の糧を与えてくださったと喜んだ。神は明日の分もきつと与えてくださると信じればよかったけれども、信じ切れない者たちもいた。彼らはもし明日与えられないと困ると危惧し、明日の分までマナを確保しておいた。そうしたら、皆腐って虫が沢山つき、食べられなくなってしまうた。

「信じるとは、今、得ている物が究極のものではなく、更にその先にも善きものを御用意くださっている神の御旨を信じ切ること」です。私たちは目に見えないものを真剣に求める生き方、それを遥かに見て喜ぶ生き方をしなければならないのです。

マルチン・ルターが「信仰の特質」という中で、同じようなことを言っています。

「誰も見ていないものを見なさい、誰もが知っているものは見てはいけません。信仰をもって生きるとはそういうことです」と。つまり、信仰生活とは「神に由来する霊的なものを注視しなさい、この世の被造物を重視してはならない」とのことです。

私たち一人一人が、神が語ってくださる御言に耳を傾け、神の御約束に期待をし続ける、そういう生き方ができないと、信仰はこの世の波風に弄ばれてしまうことが多いのではないのでしょうか。¹³² この世に連綿と執着をもって生き続けている限り、本当の意味で、神と共に生きることではないでしょう。見えないものを仰ぎ見て、生きていることにはならないでしょう。

その意味で「甦られたイエスの命に生きる」という言葉を使う時、「その命」は「この世の升では量り切れない、この世の度量衡には該当しない、特別な命」なのでしょう。そういうことをしっかり捉えておかないと「皆が幸せになっているのに、神を信じている人が幸せでないなんて、と一所懸命、教会においても、信仰生活においても、目に見える幸せらしきものを拵えたくなる」わけです。

「何も持たないようであるが、すべてのものを持っている」とパウロは言っています。けれども「何も持たないような者の集う教会こそが、かつてペトロに預けられた天国の鍵を今や預かっている。だからびくともしない。」という確信が信仰生活の中にあるのかどうかが問題になる。

第28節、

信仰によって、モーセは滅ぼす者が長子たちに手をくだすことがないように、過ぎ越の食事をし、子羊の血を振りかけました。

エジプト記の12章あたりから、神がイスラエルの脱出のために九つの災いをファラオのエジプトに下すことが出て来ます。ですが、王の心は頑なになっていて、災いを次々に下しても駄目なのです。災いで打ち破ろうとする神の力と、出エジプトを阻止しようと死に物狂いのような王の我力とがぶつかり合うのです。

ですがモーセは、相手がどんなにねじ曲げようとも、神が仰ったことだけをストレートに受けとめるのです。それで神はとうとう、従順な心をもって従うモーセ率いるイスラエルのために、ファラオの不従順で頑なな心を打ち砕こうと、最終決断をなされたのです。

そこで神は、イスラエルの人の前で「傷のない立派な雄羊を献げよ」と命じられる。このことはすごくお金がかかることなのです。「それを犠牲として神の御前に献げ、そしてその御血を柱と鴨居に塗れ、そうすれば、わたしがエジプトの国に災いを下す時にそこを避けてあげよう」と仰る。が、保証など何もないのです。

なぜか、それは蛙の害の時もブヨの害の時も、イスラエルの人たちも一緒にその被害を受けたからです。神が事を為される時は、完全に行われますから、誰彼かまわず共にその被害を被るのです。だから、長子を殺すと仰った時にも「血を塗っておいたら殺さないよ」という御言を、そんなににわかには信じられる心境ではなかったのです。

そのために、なけなしの財産をはたいて羊を買って屠って献げる。とてもじゃないが経済的にも逼迫していますし、「そんなことはできません。明日食うこともできなくなるから、いやです」と言わねばならぬ状況なのです。

でも、モーセは神の御言を少しもねじ曲げることなく、ストレートに民に語り、長老たちに語る。そして、モーセの確信に満ちた応答を、長老たちは民に伝え、民はそれを実行する。これは、モーセが、神の御言のどんな僅かな部分にも、一切疑いを差し挟まなかったからです。

それでは皆さん、あなたがその立場に立たされたら、これを民に命じられるでしょうか。「あなたがた、お金は乏しいでしょうけれど、神が求められるのですから、財産を果してでも羊を買って来て、屠って祭壇に供えなさい。そこから出る血を、柱と鴨居に塗りなさい。そのように、イスラエルの民は皆、神の御言に従いなさい」と。

「その晩、神はエジプトのすべての長子を打たれた。そうした出来事が起こった。」と書いてあります。一方、「モーセは、滅ぼす者が彼らの長子たちに手を下されることがないように、過ぎ越の食事をした後、小羊の血を振りかけました」とも。135

第⑲節、

信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。

ここでは、「本当に神を信じているなら、神が働いてくださいます」と言っています。多くの人は、神が働くのは人の働きとは違う形で現れるからこれを「奇跡」と呼びますが、「本当の信仰を持ったら、奇跡は起きるのだ」と著者は語るのです。究極的に不可能である状況、断崖絶壁に突き当たった時、その壁を乗り越える道は、神の御言に従って命を懸ける以外にないのです。

私たちはここを物語的に読んでいますから、紅海の前に立ち尽くしたイスラエルの人たちの心情は分からないかもしれない。エジプトの国を出て、さあ、自分たちが礼拝をして本当に神と一つになる国を造ろうと出発したら、後ろから大きな軍隊が追いかけて来る。食べるものもろくに食わず旅をしているわけですから、彼らはその力の前にはひとたまりもないわけです。少しでも遠くに行きたいと思ったら、目の前に大きな大きな海があって進路が塞がれてしまった。もうこれでおしまいだと考えた時に、モーセが神からの御声を聴いた。「さあ、あなたがたはこの海を越えてゆきなさい」と。

その御声に促されて思い切って海の中に入っていった。その時に水が干上がり紅海を渡れたのです。よく私たちが考えると「モーセがアロンの杖を延べたら紅海の水が引いた。だから安心して渡りました。」と割り合い悠長に捉えるのですが、そんな悠長なこと言っていられない、後ろから軍隊が迫っているのですから。水が引いたかどうかかわからないけれども「行けと言われたから行った」という以外ないのです。その瞬間「モーセが杖を延べたから水が引いた」のであって、その現象は、彼らが渡る前に水が引いていたのではない。

海に溺れるかもしれないけれども、神が「行け、この道しかないんだから、そこを行け」と言われたので一歩踏み出し、渡り始めた時、水を引いてくださった。これは「神の結果が先なのか、彼らの信仰が先なのか」という問題にもなります。

「神の御言に従わなければ『奇跡』は起こらない」のです。「奇跡が起こったから従う」ではありません。そこを、私たちは自分の人生の中でしっかり心に留めて歩み出して行かなければならないと思います。そんなことがずっとモーセの＜信仰＞として描かれているのです。

第⑳節、

信仰によって、エリコの城壁は、人々が周りを七日間回った後、崩れ落ちました。

話が突然飛ぶのです。なぜこんなところに飛ぶのか、よく分かりませんが、結局色々なことを語っていった時に、出エジプトの出来事からカナンの地を得る、そして新しい王国ができる、ということまでの一つのプロセスの中で起こった大事件として、二つのことをここで取り上げているのだと思います。

一つは、「このエリコの陥落という問題」これはヨシュア記の第6章に出て来ます。約束の地に定住するために彼らは神が与えてくださった土地ではあるけれども、神からのものとして確認してゆくために、その地においても『神の御言に従い続けること』が求められました。不可能と思われる紅海を渡ってカナンの地に入った。不可能と思われるヨルダン川を渡ってカナンの地に入った。そして今や不可能と思われるエリコという街に入って行き、この城を落とさなければならない。

この城は、当時の社会では難攻不落の城として鳴り響いていました。誰が攻めても落せない城でした。その城を「あなたがたは落とさなさい」と神に言われた。

「この世の力、知恵や富を結集して構築された牙城を崩すのは、『信仰の力＝神への信頼』だけであり、『神の御言』に従う以外にない」ということを証しさせようとしておられるのです。

神は、このイスラエルをお用いになって、お城の周りを一日一回廻って終わり、また廻って終わりとして、最後の日は七回廻ってラッパを吹いたらお城が崩れた。そんな馬鹿なと言うのですが、本当に崩れた。その城跡が遺っているから、間違いのないのです。

「イスラエルの人たちは武器を持っていなかった。神が与えてくださる御言しかなかったが、神の御言によって城は落ちた」それは、とりもなおさず、神の御言に従うイスラエルの人たちの従順によって、堅固な城は落ちたということです。138

この「従順」が、すべての困難の壁を突き崩して、「神の御言が最優位であること」を世に証しするため、この話が語り継がれてきたのだらうと思います。

第③節、

信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、不従順な者たちと一緒に殺されなくてすみしました。

モーセは、エリコの様子を調べるために斥候を遣わし、斥候はこの街に入った時、ラハブの家にかくまわれて、そこから街の様子を探りに出ます。

その時ラハブが何と言ったかという、「あなたがたの神が真実の神であり、すべてのことを御心通りになさる御方であることを信じています。既にあなたがたの神は、このエリコをあなたがたに与えてくださっていることを信じます」と、彼らをかかまうのです。そのことがつぶさに報告されたために、このエリコの城が落ちる前に、このラハブたちは助け出されて親族共々命を守られたという記録が、ヨシュア記の第2章①節から書かれています。

そういう二つの出来事を取り上げてみると、ここに書かれているラハブという女性は、清い女性、無垢な女性でありながら、実は娼婦なのです。ここに「娼婦」と書いてある言葉は、原典に添えば「神殿娼婦」なのです。異邦の神の聖なる高台の祭儀のために、苦界に身を墮としている女性なのです。「相手の神に仕えさせられている女性」なのです。

ところがそのような行為を強要させられていながら、この女性は異邦の神ではなくヤエウエの神を信じていた。言い換えると「他の宗教で働かされている人間であっても、神の憐れみの対象には変わらないことをきちんと教えている」わけです。私たちはその意味で「聖書がもっている世界的視野を学び取ることができるだろう」と思います。

御言を信ずる<信仰>があれば、神はその者を憐れんでくださり顧みてくださる。神の御言に従いさえすれば、神の国に入れる。ヨハネ福音書にあります通り、「一人も滅びないで永遠の命を得るためである」という御言は、正にこういうところでも確実に成就しているのを示していると思います。

第⑳節から㉔節

これ以上何を話そう。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、また預言者たちのことを語るなら、時間が足りないでしょう。

信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、約束されたものを手に入れ、獅子の口を塞ぎ、燃え盛る火を消し、剣の刃を逃れ、弱かったのに強い者とされ、戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。女性たちも死んだ身内を生き返らせてもらいました。

これから後のところは、これ以上何を話そう、もう言わなくてもいい。だからここで終わればいいようですが、これからまだ㉔節まであるのです。そこで幾人かの人が登場してきます。この登場して来る人物をみて見ますと、すごく面白いなと思うことは、ギデオンは士師記の6章、バラクは士師記の4章で、「順序が逆になって」います。

サムソンというのが士師記の13章ですか、エフタが11章、「これも逆になって」います。ダビデがサムエル記上の16章、サムエルがサムエル記上の1章、二人二人ずつがそれぞれ「順序が逆になって」いるのです。「ちょっと面白いな」とそんなところで面白さを味わいながら読みました。

結局こういう人々は、神によって臆病者であったのに用いられたり、力を神から与えられているのに心揺らされて、自分の力を発揮できなくなったり、悔い改めてもう一度神に赦して頂く人々だったりするわけです。

その後「また預言者のことを語るなら」とあり、預言者が登場します。サムエルから後の預言者を繋げていこうという「前期預言者サムエル」という意識があったのでしょうか。語り終えるのには、時間が足りないでしょう。「信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、約束されたものを手に入れ・・・」　すごく面白いですね。

ここに出てくる人たちを一つ一つ挙げると、国々を征服したり、外敵に勝ったのは、ギデオンやバラクがそうです。正義を行ったのは、サムソンやエフタを期待したのでしょうか。約束されたものを手に入れたのは、王国を得たり、大いなるものを掴んだサムエルとダビデで、ここに登場して来ます。「獅子の口を塞ぎ」というのはダニエルで、それから「燃え盛る火を消し」これは、彼の仲間のシャデラク、メシヤク、アベデネゴです。

「剣の刃を逃れ」この辺になると色々な人が出て来ますが、現実にはダビデとかエリヤとかいう人を想像したのでしょうか。「弱かったのに強い者とされ」とか、女性が自分の子どもを返して貰ったとかいう事柄は、列王記上下に出て来ます。¹⁴²
例えば「死んだ身内を生き返らせて貰いました」というのは、シドンのサレプタの女性がエリヤにひとり息子を生き返らせて貰ったところだろうと思います。

その次には「他の人たちは、更にまさったよみがえりに達するために、釈放を拒み、拷問にかけられました。」とあります。恐らくこの辺のところは、旧約聖書の外典マカバイ記(新共同訳では続編)の中の第2の7章①節から⑥節に七人兄弟の殉教というのが出て来ます。

第③⑥節、③⑦節、③⑧節

また、他の人たちはあざけられ、鞭打たれ、鎖につながれ、投獄されるという目に遭いました。彼らは石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され、荒れ野、山、岩穴、地の割れ目をさまよい歩きました。世は彼らにふさわしくなかったのです。

この辺は皆さん方も色々な人物を思い起こすことができるだろうと思います。例えば、ゼカリヤは石で打ち殺されました。新約時代になると使徒言行録にあるステファノもイエスを証しするために石で打ち殺されたという記載があります。

第③⑨、④⑩節、

ところで、この人たちはすべて、その信仰のゆえに神に認められながらも、約束されたものを手に入れられませんでした。神は、私たちのために、更にまさったものを計画してくださったので、私たちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかったのです。

終わりの部分は、後に編集された時に挿入されたのだらうと言われています。確かにそうかもしれません。ここで終わってしまったら、信仰とは何なのか、となりますから、それで入れたのだらうと思うわけです。

信仰することと、幸いを手に入れることとは、イコールではない。神を信じることは、今ここで、私が幸せになるかどうかの問題ではなく、それよりも、終わりの日に究極の幸いを掴めるかどうかの問題なのです。「裁きの日を見据えたスタンスでものを見てゆかない限り、信仰は意味を失うのだ」と著者は言おうとしています。

「神は、私たちのために、更に優ったものを計画してくださったのです」と。

ここで、「神が選んだ雛形として据えられたヘブライ人」と、「今や、キリストの贖いを
知った上で生きている私たちキリスト者」との違いを言っています。
私たちは完全な愛の姿を、あの「イエスの十字架の上に知ることができた」のですが、し
かし「彼らにはそれができなかつた」。だからそれを見たいと願い続け、そのことが起こ
ることを信じて闘い続けた。

そして、万が一、私たちの父母が私たちを見放したとしても、神が私たちを迎え入れてく
ださることを、基本的に確認するのが<信仰>なのではないかと思うのです。信仰は御利
益の求めではないという意味が、今日のところを本気になって読むとよく分かります。

信仰の道は、この世的に見て、あり得ない道を主と共に選び取り、決して気楽、安寧な道
を歩むことではないのです、内においても外においても、絶えず霊的な闘いに明け暮れる
道を進まねばならぬ覚悟が必要なのです。しかし、それと同時に、インマヌエル（共にい
ます神）なる主イエスから、「わたしの御言を味わい尽くせ。わたしを知り、わたしを喜
べ。躍り上がってすべてに賛美、感謝せよ。」と励まされつつ歩む、輝かしい御国への道
程でもあるのです。

最後に、「あなたには、そんな道を進む覚悟と、主にある祝福とが、満ちていますか？」
と問われているのではないのでしょうか。
(1998年1月10日)

写者より、

松山幸生先生がよく選んでくださった讚美歌21の522番「キリストには変えられません」の原詩訳を森容子
先生にお願いしました。モーセのイメージに合うと感じ記載します。また、今回も特別にヨセフの説教をお
願いしました。

「生きるは、キリスト」

- 1 生きるはキリスト 溢れる富を得（う）るより
釘が貫いたその手に すぎる道を選びます。

世の王座に就くより 罪の奴隷よりも
生きるはキリスト 世の何ものより

- 2 生きるはキリスト あまねく誉れ得（う）るより
聖き御旨信じて 従う道を選びます。

世の王座に就くより 罪の奴隷よりも
生きるはキリスト 世の何ものより

「ヨセフ物語 8 先に遣わされた者」

創世記 45 章：①－⑮、⑲－⑳節

森 容子

ヨセフ物語 7 を振り返りますと、私はその説教の後半部分にこんな言葉を置きました。

「⑳－㉑節は、四男ユダの『気高い執成し』ともいえ、犠牲を一身に引き受ける覚悟の嘆願の叫び。父ヤコブへのユダの思いは、本当に半端ではありません。ですが彼は、目の前にいるヨセフに対し、哀感や憐憫に訴えるのではなく、事実を事実として思い出させ、それを積み重ねることにより事の是非、重大性を増し加え、それと共に、家族への私心のない深い思いやりの心をあからさまに示しています。そして、ユダが事実上ベニヤミンの保証人としての役割を果たしていることも、ヨセフに明確にしました。

ヨセフは、権力に任せた弟ベニヤミン捕獲作戦という謀を胸に抱えていましたが、一途で気高い、自己犠牲的な兄ユダの思いを前にして、自分の身勝手さに一石が投げられたこととなったでしょう。元々ヨセフも、とても正義感の強い人物なのですから。彼は、兄たちとの間の誤解も早く解きたいでしょうし、もはや、素性を黙っているのもこれまで・・・という時期が来たのではないのでしょうか。」と。

それでは、本日の聖書テキストの冒頭①－③節をお読みしましょう。

ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。

ヨセフには、これまで何度も隠れて泣いたというシーンがありましたけれど、ここで初めて、身を明かした兄弟たちの前で、子どものように声をあげ、堰を切ったように熱い涙を流し続けたのでした。その声があまりに大きかったので、席を外させたエジプト人の配下にも聞こえてしまい、その噂を聞いた宮廷の人々も、ヨセフたちの再会の事情に甚く驚くと共に、またその喜びを共にしたことでしょう。

続く④節

ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。」

死んだと思っていたヨセフがこう名乗りを上げたとき、それもエジプトの宰相となって自分たちの前に立ち、大声で泣き始めたとき、兄弟たちは、若き日にヨセフを殺そうとし、奴隷として外国へ売り飛ばそうとした、自分たちの罪の重さに打ちのめされたことでしょう。そして、これから始まるであろう懲罰の恐ろしさに、口が利けず、身を固くしていたに相違ありません。謝って赦してもらえる事柄では決してありませんでしたから。

しかし、ヨセフの口から流れ出てきた次の言葉は、まったく予想だにしない、神の御業を媒介にした、まったく赦しの言葉でありました。

⑤節

しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。

あっけにとられている兄弟たちに、尚もヨセフはその神の御業について説明を加えます。

⑧節

わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。

そしてヨセフは、父ヤコブの存命を確かめたうえで、

⑨－⑩節

「エジプトでわたしが受けているすべての榮譽と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。そして、ゴシェンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。そこでのお世話は、わたしがお引き受けいたします。」

と申し出ます。ファラオが見た夢のお告げによれば、飢饉はあと5年続く予定なので、ヨセフは家族全員をこちらへ呼び寄せ、彼らが何不自由ない生活を送れるよう、面倒を見ようと決心したのでした。

ここまでのシーンもとても感動的ではありますが、私がこの度、特に感動したシーンは、⑭節「ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。」という場面です。

特に、今までまったく感情を顕わにせず、言葉さえひと言も発しなかったような孤独で頑ななベニヤミンが、「ヨセフの首を抱いて泣いた」という、ようやく素直な兄弟愛を返したことに、何かほっとする安堵感さえ覚えました。

ベニヤミンは兄ヨセフを失って以来、ずっと心を閉ざして生きて来たのではないかと拝察します。父親にさえ不信感を持ち、末っ子として父や兄弟たちに特別扱いでちやほやさ

ればされるほど、兄ヨセフの犠牲を覚え、いつか自分もヨセフと同じ運命を辿るのではと、警戒心と不安感を抱えていたのかもしれませんが。もしかすると、それでわざとほうけ者のようなふりをして、自分自身を守ろうとしてきたのかもしれませんが。が、この度、愛しい兄ヨセフに再会できて、やっと彼は、素の自分に帰ることができたのです。

②節に「ヨセフは更に、全員にそれぞれ晴れ着を与えたが、特にベニヤミンには銀三百枚と晴れ着五枚を与えた。」という、今迄通りの自分への兄ヨセフの依怙鼻屑も、今回は素直に喜んで、快く受け取ることができたでしょう。

このことは、ベニヤミンひとりの問題ではありません。そこに招かれた他の兄弟すべてにおいて、弟ヨセフとの間の和解だけでなく、罪を犯した自分自身との和解、そして何より「神様が予めヨセフをエジプトへ遣わされた」という信仰告白を自分たちも信じることにより、神様との間にも赦しと和解が成立するという、驚くべき「三者の和解」がここに生じたのです！

続く③節に「ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。」とあります。

彼らはどれほど嬉しかったことでしょうか、このひとときを、どれほど心に抱きしめ、胸に焼き付けたことでしょうか。長年、わだかまりと悔いの塊となって、乱れ、こんがらがっていた糸が、見事にほどけたのです。まさに「神のなさることは、時宜にかなって美しい」という神の現実が、今、ここに輝いているのです。「ああ、生きていてよかった！」と心底、互いに実感し合ったことでしょう。

さて、⑤-⑥節で、兄弟たちはエジプトからカナン地方へ上って行き、父ヤコブのもとへ帰り、直ちに報告しました。「ヨセフがまだ生きています。しかも、エジプト全国を治める者になっています。」と。それを聞いた父は、あまりの驚きに気が遠くなり、失神しそうになりました。彼らの言うことが理解不能な、信じがたい事柄だったからです。

でも、彼らはヨセフが語った通りのことを、順々に残らず父に語り、ヨセフが父を乗せるために遣わした素晴らしい馬車も見せましたので、父ヤコブもやっと信じて、正気と元気を取り戻しました。

そして、ヤコブならぬイスラエルは、⑧節でこう言ったと記されています。「よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。わたしは行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい。」

この時の父ヤコブは、双子の兄エサウのかかとをつかんで生まれてきたゆえに「ヤコブ」と名付けられた、人を押しのける者ではありませんでした。ヤボクの渡りで神の霊と一晩戦い、「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」との勝利宣言を頂き、神に祝福された「イスラエル」に変わっておりました。

ここで皆さん、ちょっと考えてみてください。ヨセフがやっと兄弟の名乗りを挙げられたとき、彼はなぜ、ここまでの大変な道のり、数々の只ならぬ苦労話を、まず語らなかったのでしょうか？ そして兄たちに、血のつながった兄弟である自分を落とし穴に閉じ込め、外国へ売り飛ばそうとした真の理由をなぜ、厳しく問い質さなかったのでしょうか？

その理由は、ヨセフにとってそれらのことは、もはや何ほどのことでも無くなっていたからです。彼がエジプトの宰相に上り詰めたからでしょうか？ いいえ、それも結果論で、彼にとって最重要なことではありませんでした。

ヨセフには、主なる神様の御声が絶えず聞こえていたからです。それは神の祝福に与ることで、彼にとっては魂が最も満たされる時でありました。彼がエジプトに入ってから記述には、何度も「神がヨセフと共におられたので」とか「神が彼を祝福されて」という言葉がありましたね。それは、必ずしも順境の時ばかりではありません。むしろ逆境の時にこそ、彼は、御心を告げられる神様の御声に聞き、その御臨在を確信したに相違ありません。

兄たちに身を明かす前にヨセフに聞こえた御声は、こんな御言だったでしょう。「わたしがあなたを、あなたの兄弟たちより先にエジプトに遣わしたのは、この国にあなたたちユダヤ人の数を増し、あなたたちを生き永らえさせ、大いなる救いと祝福に至らせるためである。しかるに、あなたを実際にここへ導き、ここへ遣わしたのは、あなたを陥れた兄弟たちではなく、わたし自身である。わたしがあなたをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としたのである。だからあなたは、兄弟たちがあなたをここへ売ったことを責めて、深く悔やむように、恥じ入らせるようにさせる必要はない。」と。

ヨセフは、この御言の前にひれ伏し、心から恵みの神を崇め、兄弟への積年の恨みや確執の心を溶かして頂いたのでしょうか。神様は、兄弟を赦せないという重い苦しみの鎖から、彼を解き放ってくださっていたのです。

「先に神によって遣わされた者」というモチーフは、旧約聖書の色々な場面に登場しますが、特に私はエステル記を想起致します。そのエステル記の中に「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」という文のくだりがありますが、今回のヨセフ物語の「命を救うために、神が私をあなたたちより先にお遣わしになったのです。」に相通じます。双方共、神の御計画、御心、御摂理であられたということです。

私たち其々の人生にも、無意味、不条理、不当な扱いと感じられる、納得のいかない在り方を強いられることが多々あったかもしれません。順調に進んでゆくはずの道が、途中で折られてしまい、思ってもみなかった方向転換を余儀なくされるという、無念、失意も、多々味わわれたかもしれません。

しかし振りかえってみますと、その道の先はすべて、今の自分、キリスト者として主と教会にお仕えし、主を礼拝する民として選ばれている自分に繋がり、ひいては主と一層固く結ばれる道を辿っているのではないのでしょうか。

この日のためにこそ、主は、私たちの人生に、予め、様々な布石を打ってこられましたが、私たちは、そうした神の御計らいになかなか気付けません。ですが、「この日のためにこそ、神は私を」とか「神が私を先にお遣わしになった」と、信仰において、出来事の主語を<他者>から<神>に変換して、意味を捉える視点を変化させることにより、抱き続けてきた独自のわだかまりや不満が消え、そこに、神様への感謝と讃美が生まれ出てくるのです。

すでに賜っていた神の祝福が、そこに明確に見えてきます。そして、神様が臨在される神の国が、ここに、今を生きる私たちの目の前に出現します！

さあ、皆さん、心を込めて、主なる神様に黙祷をお捧げ致しましょう。

写者あとがき

第11章を「信仰の先達として証しされた人びと」と題して5回に渡り学んでまいりました。①節「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」という難しい宣言文を5ヶ月間黙想し続けてきました。私にとっては難しいことが多くありました。今回の②③節だけをとってみても、「その子の美しさを見、王の命令を恐れなかった」という意味は説き明かしがなければ理解することができないところでした。この一行をとっても聖書は独学では困難であるばかりでなく私には不可能のように思われます。

旧約聖書、新約聖書の歴史的背景、地理的条件等学問的なこと等、信仰の外側のことについていくら広い知識があっても分らないこと、信仰の中に入って行って（入れていただいて）初めて分かることの方が圧倒的に多いです。

第11章は「信仰によって」という言葉が沢山用いられていますが、一つ一つの説き明かしに覚醒される思いで過ごさせて頂きました。繰り返しになりますが第③④節、娼婦ラハブの行動から「聖書がもっている世界的視野を学ぶ」ことができた時の驚きを私は隠すことができません。

②節から沢山の人物が登場します。それも歴史の登場の順番ではなく、なぜなぜと読んでも意味がわかりません。それを松山幸生先生は一行でまとめられています。「結局こういう人々は、悔い改めてもう一度、神に赦して頂く人びとだったのです」と。そして。

「神が私たちに与えてくださる恵みの基は、アブラハムとモーセを介して、既に与えられていたのだ」という証明をこれでもかこれでもかと説く著者の心情を現代に分かりやすく説明してくださっていると、思い感謝に耐えません。

今回も森容子先生には「私に分かるように」工夫を凝らして頂きました。原文通りでない写書がありますことおゆるしくくださいますようお願いいたします。

更に森先生には、この文脈では語りが少ないヨセフについての説教を重ねてお願いしました。

「そこに招かれた他の兄弟すべてにおいて、弟ヨセフとの間の和解だけでなく、罪を犯した自分自身との和解、そして何より『神様が予めヨセフをエジプトへ遣わされた』という信仰告白を自分たちも信じることにより、神様との間にも赦しと和解が成立するという、驚くべき『三者の和解』がここに生じたのです！」

という深い意義を説き明かしてくださいました。

私は恵まれお二人の先生から御言葉を「聴き、導かれる」幸いをいただいております。感謝で一杯でございます。尚、文中のアンダーラインは写者によります。2023年8月11日